2018年3月3日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

・読み：第2章51～60節

・引用：第14章12節

おはようございます。

日本はまだ寒いですが、昨日インドでは春の訪れを祝う color festival(holi festival) が行われました。

前回は「罪の原因はラジャグナである」という『バガヴァッド・ギーター』の説を紹介し、そのラジャグナが、カーマ(欲望)、ローバ(貪欲) 、クローダ(怒り)を生み出すこともお話ししました。

そしてラジャグナのしるしについて、第14章7節を説明しました。

今日はラジャグナが増大するとどんなしるしが現れるか、についてお話しします。

このことは聖典の勉強のために重要なだけでなく、自分の性格をチェックする面でも役立ちます。

皆さんの性質の中には、サットワ、ラジャス、タマス、の3つがあります。

タマスは一番鈍く、動かず、暗く、死人のような性質です。

ラジャスは働き過ぎ、野心、嫉妬、欲張り、などを生み出します。

サットワはバランス、調和、平安、幸せ、穏やかさ、をもたらします。

皆さんはどのような状態を望みますか？

タマスの状態は死んでいるのと変わりません。

ラジャスの状態ではストレスにさいなまれます。

ストレスはラジャスのしるしであり、ストレスを抱えている人は間違いなくラジャス的な人であると言えます。

ラジャス的な人は心が落ち着かず、欲望がいっぱいで、働き過ぎてストレスに苦しみますが、もちろんこのような心の状態では幸せは望めません。

皆さんが望むのは幸せで穏やかな状態であり、これには誰一人として異論はないと思います。

「幸せ」という言葉はごく普通にしばしば使われますが、何が幸せで何がそうでないかをどんな基準で判断したらいいでしょうか。

そのために3つのグナというアイデアが重要になってくるのであり、過去の講話でもこのトリグナ(3つのグナ)にスポットを当てて、1年以上の長期にわたって説明しました。

そして今回のテーマである罪に関連して、またグナについてお話ししているわけです。

**ラジャスの状態では幸せを得られないだけでなく、罪を犯す可能性があるのです。**

私がなぜラジャス、そしてそれが増大した時のしるしについて説明するのか、その目的を理解してください。

『バガヴァッド・ギーター』の勉強会なのに罪のことばかり話す、と心配されるかもしれませんが、目的は罪を取り除くことであり、そのためにはまず罪とは何か、その原因となっているのは何かを知る必要があるのです。

魔法や、マントラを一言二言唱えただけでは罪はなくなりません。

さまざまな努力や忍耐や知的理解が必要です。

第14章12節を見てください。

***また、物事に対する強烈な執着、活動の意欲、 仕事への野心、焦燥感、熱望などが心に生じるのは、ラジャスが優勢な時である。バーラタ族の勇者(アルジュナ)よ！//14-12***

とても具体的かつ詳細に書かれています。

皆さんにとっての実用的なチェックリストとして使えます。

この節を説明するにあたって、私は注釈者として有名なスリッダーラ・スワミの解説を勉強しました。彼は学者でありかつ僧侶でもありました。

この12節の翻訳を読んだだけでは皆さんはイメージが湧きにくいのではないでしょうか。

たとえイメージを持てたとしても、それは浅い理解であったり、時には間違っていたりする可能性があります。ですから私はスリッダーラ・スワミの説を紹介しようと思います。

まずは**ローバ**(lobhah)ですが、英語では greed 日本語では **貪欲**(欲張り)です。

ローバ＝貪欲　で皆さんはどんなイメージを持ちますか？

貪欲という言葉は普通の日本語ですが、皆さんの理解は浅いことが多いのです。

ローバの定義はなんですか？

参加者：執着

執着はまた別の言葉です。

参加者：他人のものまで欲しくなる

他の意見はありませんか？

参加者：必要以上に欲しくなること

なかなかいい意見ですね。

英語で、　**Need　and　Greed**(ニード　アンド　グリード：**必要と貪欲**)というとてもわかりやすいフレーズがあります。

Needは必要ということであり、その場合は「どれぐらい必要か」という量または数がおのずから決まります。

また必要という観点からは何が必要かということも決まります。

デパートに入れば多種多様な商品が数えきれないほどあります。

まずは「本当にそれが必要か？　他のものではだめなのか？」を考え、次に「どれほど必要か」を判断しなければなりません。

「何をどれぐらい」(What & How Much/How Many)を考えて、**必要という基準**でチェックして自分をコントロールしているなら、あなたは欲張りではありません。

この必要の限度を超えると貪欲になります。

ローバについて代表的な例を2つ挙げます。

まずお金です。

どれぐらい必要かを考えずに、できるだけ多くのお金が欲しいと考えるなら、それを道徳的な方法で達成するのは難しくなります。

嘘や非道徳的な方法でお金を得て、その結果罪を犯すことになります。

次の例は食事です。

体にとっては十分な食事を取っていてお腹はいっぱいなのに、美味しい御馳走を前にして気持ちがさらに食べることを要求します。

そしてお腹を壊したり、夜寝つけなかったり、翌朝なかなか起きられなかったりします。

ごく普通の例を挙げましたが、ポイントはNeed & Greed であり、『バガヴァッド・ギーター』は満足することの大切さを繰り返し教えています。

満足なしには幸せはありませんし、過剰な欲望は満足をもたらしません。

**「必要な限度を超えて貪欲になってはいないか？」**と絶えず自己診断することが大切です。

12節の翻訳ではローバは*「物事に対する強烈な執着」*となっていますが、よりシンプルな言葉を使うなら「貪欲」です。

次の**プラヴリッティ**(pravrttih)は、絶えず活動していて休みがあっても1秒たりとも仕事を休めない、という状態のことです。

**カルマナーム アシャマハ**(karmanam asamah)のカルマナームは、建物を建てたり庭に木を植えたりなどの、「何かを作りたい」と思うことです。

アシャマの単独の意味は、ある仕事をしながら別の仕事のことを考える、ということです。

昼食を作りながら夕食は何を作ろうかと考えるのはその一例です。

シャマは自分でコントロールしてあることを止めることですが、その否定形のアシャマは自分ではストップできないという意味です。

カルマナーム アシャマハ　と二つの言葉を合わせるとその意味は、いろいろな仕事をストップできない、ということになります。

**スプリハー**(sprha)は自分にとって良いものか良くないものであるかを考えず、自分を楽しませるものなら何でも欲しい、と考えることです。

自分にとって良いのか良くないのかの差異は、時には非常に微妙です。

ラジャスが増大した時のしるしについてスリッダーラ・スワミの説も加えて、

・必要でなくても求める

・活動を休止できない

・ものを作るのを止められない　　ある仕事をしながら別の仕事のことを考える

・楽しいものは自分にとって良い悪いかに関わらず何でも欲しがる

と14章12節を説明しました。そしてラジャスが増大した結果、我々は罪を犯します。

次は何が我々の**欲望の対象**となるのかについてお話ししますが、これに関連してあるエピソードを紹介します。

ＭＩＴ(マサチューセッツ工科大学)はアメリカのボストンにある世界的に有名な大学ですが、理工系の学問だけでなく、哲学、霊的な講座もあります。

我々ラーマクリシュナ・ミッションのボストン支部の僧侶は、ヒンズー教に興味のあるＭＩＴの学生のために、毎週か毎月かはわかりませんが、定期的にキャンパス内で勉強会を開いていました。

ＭＩＴにはヒンズー教だけではなく、キリスト教や仏教についても同様のシステムがあります。

ＭＩＴにはもちろん宗教学部はあるのですが、学生たちからはアカデミックな比較宗教学等の学問とは別に、実際に宗教的実践している人間の話を聞きたい、という要望があったのです。

ヒンズー教や仏教を学問的に教える学者の話ではなく、実践家の話を聞きたかったのです。

聴講生の中でも優秀な学生の一人はミッションのボストン支部にも出入りするようになりましたが、後に彼はＭＩＴの教授になりました。

教授になった後も彼とミッションの僧侶との交流は続いていましたが、ある時彼は僧侶に対して自分の勉強のための本を何か推薦してくれるよう頼みました。

僧侶が推薦した本は『ラーマクリシュナの福音』でした。

教授は言われるままに『ラーマクリシュナの福音』を購入し、自宅で時おり読んでいました。

次に僧侶と会う機会があり本の感想を聞かれた教授は、「読んではみたのですが、いたるところに**女と金**(woman and gold)を避けよという話が出てくるので、なかなか進みません」と答えました。それに対して僧侶は、「もし女と金の話に抵抗を覚えてイライラするなら、そこは飛ばしてそれ以外の部分を読んでください」とアドバイスしました。

半年か一年後また僧侶と会った時に教授は、「スワミ、『ラーマクリシュナの福音』のコピーを何部お持ちですか？」と尋ねました。

僧侶がそのわけを聞くと教授は、僧侶の手持ちのコピーを全部購入したい、とのことでした。

実は心理学の国際会議に参加した教授は、そこで講演した世界的に著名な心理学者の言葉に強く触発されたのでした。

その心理学者は現代アメリカが抱える解決すべき問題のトップ2を、

**ドル**(お金)**が王　セックスが女王** (dollar-king　sex-queen)

と表現したのです。

この言葉を聞いた教授は『ラーマクリシュナの福音』の重要性を理解し、現代アメリカの問題を解決するのに少しでも役立てばという思いから、『ラーマクリシュナの福音』を購入し知人に配ろうと考えたのでした。

欲望の対象はいろいろありますが、そのうちメインの二つを説明するために、このエピソードを引き合いに出しました。

我々は欲望の対象に引き付けられるのですが、**誘惑**(temptation)ということについて考えてみましょう。誘惑は本当に存在しているのでしょうか？

多くの人が勘違いしているのですが、誘惑とは外にあるのではなく、我々に内在する問題なのです。自分の中に誘惑の源がなければ、外のものに引き付けられることはありません。

かつてスワミ・ヴィヴェーカーナンダはこのことをはっきり指摘しましたが、その時に用いた例はとても有名です。

たとえばこの部屋が金銀財宝で溢れていたとしても、部屋にいるのがたった一人の赤ちゃんだけだったとしたら、その赤ちゃんはそれを盗もうと考えるでしょうか。

心の中に盗むというアイデアがない赤ちゃんは、盗もうとはしません。

赤ちゃんはお金に誘惑されるということはありません。

同じように大変な美人がいたとしても、小さな男の子は彼女に特別な感情を感じません。

罪を犯さないために我々は誘惑について理解しなければなりませんが、誘惑は心の中の問題であり、我々に欲張る心があるから外部の対象からの誘惑を感じるのです。

**誘惑は我々の心の表れなのです。**

次にヒンズー教聖典による罪の分類について話します。

そして罪を取り除く方法についても説明します。

これまでにも罪という意味の言葉を紹介してきましたが、Patakaも罪を表します。

罪には3つの種類があります、

**①マハー・パータカ**(Maha-Pataka) 最も重い罪

**②ウパ・パータカ**(Upa-Pataka)　　　　　　　　　　　　 中程度の罪

**③プラーサンギカ・パータカ**(Prasangika-Pataka) 上記2つ以外の罪

**＊マハー・パータカ**

**・殺人**

**・聖典で禁じられているような性的行為**

**・飲酒**

お酒を飲む習慣のある人にとってはショックかもしれませんが、ヒンズー教に限らず、キリスト教、イスラム教、仏教、どの宗教にもこの種類の禁忌はあります。

**・罪を犯した人と付き合うこと**

聖なる交わり(holy company)という言葉は聞いたことがあると思いますが、同じように悪の交わり(evil company)もあります。英語に「ある人がどんな人かは、彼が付き合っている人々を見ればわかる」という言葉があります。神聖な人を探すのは難しく、あなたが神聖な交わりをそれほど好まなくてもまだ構いません。しかし罪を犯した人と交わるとその影響を受けてあなたも罪を犯してしまう恐れがあります。少なくとも罪を犯した人とは付き合わないようにしてください。もちろんあなたが聖者なら、このことは関係ありません。聖者は罪人の影響から自分を守ることができるだけでなく、相手を変えることもできます。あなたが聖者でないなら「悪い人を変えてあげよう」などと考えないでください。逆にあなたのほうが相手の影響を受けてしまいます。自分の状態をよく考えてください。自分が清まってもいないのに悪い人を変化させようとして自分も悪くなってしまう、ということはよくあります。悪の交わりは毒と同じであり、避けるようにしてください。

**・ヴェーダを批判する**

ヴェーダはヒンズー教の基礎です。同じようにキリスト教の基礎である聖書を批判されたら、キリスト教徒はどう思うでしょうか？イスラム教に到っては、もしコーランを批判したら命の危険があります。ヴェーダを批判しても生きることはできますが、コーランを批判すると命の保証はありません。スワミ・ヴィヴェーカーナンダは、ヴェーダだけでなく他宗教も尊重するように言いました。ベルルマトにおいてヒンズー教以外の他宗教を批判することを禁じるルールを作りました。

**・裁判で偽証して人を傷つける**

たとえば殺人事件の裁判などで、金銭で買収され偽証して無実の被告を刑務所に送ってし

まう、などのことです。

**＊ウパ・パータカ**

**・毎日の儀式(ホーマなど)を怠る**

**・グルを侮辱する**

仕事の関係で相手に反対意見を述べることはこれには該当しませんが、侮辱は許されません。

**・神を信じない**

**・軽い盗み**

**・金銭を貰ってヴェーダを教える**

グルは空気を食べ水を飲んで生きているわけではありません。聖典を教えても収入を得られないのは信じられないことですが、昔はシステムが違いました。王侯貴族や地主、商人たちがグルをサポートしていました。そしてグルが貰うのも生きていくのに必要最低限の非常にささやかなものでした。現代の大学教授の中にはかなりの高給を得ている人もいますが、昔のグルは大変貧しく、生きていくのが精一杯でした。それでも王様たちはグルを非常に尊敬していました。

**・高利貸**

**・燃料として使うために大きな樹を伐採する**

大木を切ることは環境への影響が大きいからです。

**＊プラーサンギカ・パータカ**

**・小さな嘘**

嘘にも二種類あり英語で「黒い嘘と白い嘘」(black lie and white lie)という表現があります。先程の偽証などはblack lieと言えますが、もっと程度の軽い嘘もあります、たとえばwhite lieにはどんなものがあると思いますか？

参加者：冗談/人助けの嘘/嘘も方便の嘘

たとえばあなたが友人にE-Mailを送ったのに1週間経っても返信がなかったので、電話で確認すると友人から返ってきた言葉が「忙しかったから」だった時、おそらくそれは本当の理由ではないでしょう。1週間の間に2分程度の時間もなかったでしょうか？実際にはE-Mailのことを忘れていたのか、後回しにしていたために返信しなかったのです。友人の返事は嘘なのです。皆さんも内省してみてください。たとえば皆さんがよく言う「私は何でも大丈夫です。OKです」という言葉もwhite lieである場合が多いのです。純粋になるのは簡単ではありませんが、もし純粋になりたいなら内省と自己分析をして小さな嘘でも言わないようにしてください。先程のE-Mailの例で言うなら、率直に「すみません。返事をするのを忘れていました」と言えば済むことです。「忙しい」と言うと嘘になってしまい、相手もその言葉を信じません。皆さんの日常でも、この種類の小さな嘘は普通に使われているのではないでしょうか。

**・借りたものを返さない**

あなたが友人から一冊の本を借りたのに返していないとします。忘れていた場合話は別ですが、借りたことを覚えているのに面白い本だし自分で買うと高いので返さないままでいるとしたら、盗みとまでは言えませんが罪です。

次に**罪を取り除く方法**について話します。

これまで罪についていろいろ話してきましたが、これからヒンズー教が教える罪を取り除く方法を紹介します。他宗教のアイデアと似ている部分もありますが、ヒンズー教独自の興味深い考え方もあります。

その前に私からお尋ねしますが、日本ではポピュラーな仏教では罪を取り除く方法として、何が教えられていますか？

私が聞いているのは「何か良いことをする」(善行)ではなく、罪を取り除く方法です。

後で説明するヒンズー教の方法と比較対照するためにも、仏教やキリスト教の考え方を知ることは有意義だと思うのでこの質問をしています。

参加者：先祖供養

参加者：お経をあげる

参加者：念仏などのお経よりは短いフレーズを唱える

参加者：お布施

参加者：貧しい人に奉仕する、寄付をする

参加者：懺悔

分かりました。それではLさん、キリスト教の考え方を紹介してください。

Ｌ氏：プロテスタントは神様に、カトリックは神父様に罪の告白をします。

　　　そしてカトリックは神父様から赦しを受けます。そして「主の祈り」を何度も繰り返し唱えます。正しい行動を教えてもらいそれを実践します。貧しい人や病人に奉仕します。

ヒンズー教の聖典には、他宗教に比べて多くの罪を取り除くための方法が書かれています。

だからと言ってヒンズー教徒が特別罪深い人達であるとは考えないでください。

ヒンズー教の教える罪を取り除く方法は、方法論的かつ系統的です。

**＊パーパ・ニヴェーダナ**(Papa-nivedana)

懺悔に似ていて、**罪を告白し許しを乞う**ことです。

パーパは以前にも出てきましたが「罪」の意味、ニヴェーダナは「渡す、供える」ということであり、たとえば「ラーマクリシュナの写真の前に御菓子をニヴェーダナする」というように使いますが、パーパ・ニヴェーダナという形で用いる時は「言う」という意味です。

神の前、またはヤッギャーでホーマの神聖な火の前で自分の罪を告白し、赦しを乞います。

ヒンズー教では懺悔という伝統はないのですが、実際には個人が聖者の前で罪を告白するということは行われます。聖典に書かれているのは個人と僧侶が一対一ではなく、複数の僧侶が集まっている場で個人が率直に自分の罪を語る、というやり方です。ひとつ例を挙げます。

ラーマクリシュナ僧院で事務局長(general secretary)を務める地位の高い僧侶がいました。

彼は霊的にも高くかつ厳しさも持った人間であり、一般の僧侶たちからは畏怖されていました。

ある時若い僧が彼に対して、「マハラジ、私はたくさんの良くない行為をしているのですが、あなたにそれを話すことは怖くてできません。どうすればいいでしょうか？」と尋ねました。

もちろん若い僧が良くない行為をしたのは自分の意志に反してのことであり、それに対する自責の念や後悔で心にわだかまりを抱えていました。

それでも厳しいことで知られるスワミに対して、自分の良くない行いについて話すことは怖かったのです。

このマハラジはスワミ・マダヴァーナンダジという方で、有名な学者でもありました。

マダヴァーナンダジは若い僧侶に対して、「それならベルルマトにあるホーリー・マザーを祀るお寺に行って、マザーの前で自分の過ちを告白しなさい」とアドバイスしました。

若い僧が「マザーは赦してくれるでしょうか？」と尋ねるのに対して、マダヴァーナンダジは「絶対に赦してくれます。お母さんですから」と答えました。とても良い答えだと思います。

ホーリー・マザーはお母さんであり叔母さんではないので、もちろん赦してくれるのです。

パーパ・ニヴェーダナの別な形として、神聖な河たとえばガンジス河の岸辺に立ち、あるいは河の水に首まで浸かり、女神(マザー・ガンガー)に対して自分の罪を告白し赦しを乞います。

ガンジスという響きに私は違和感を覚えるので**ガンガー**と発音しますが、インドにシヴァ神を礼拝するシヴァの日があるように、ガンガーの日もあります。

この特別な日の名前は　ダシャ・ハラ　呼ばれます。

ダシャ・ハラ(Dasha hara)は普通ダシェラ(Dashera)と続けて発音されますが、ダシャは数の10という意味であり、この日に沐浴すれば10種類の罪が消滅すると言われています。

詩人で劇作家のギリシュ・チャンドラ・ゴーシュはシュリ・ラーマクリシュナの有名な直弟子でしたが、彼の日頃の素行は決して善良なものとは言えませんでした。

ダシャ・ハラの日にドッキネッショルにいたギリシュに対してラーマクリシュナは、「ギリシュ、あなたはガンガーに行き沐浴しなさい」と言いました。

ギリシュはガンガーで沐浴することがあまり好きではありませんでした。

ガンガーに行くことを渋るギリシュに対してラーマクリシュナは、「ぜひ行きなさい。今日行って沐浴すればあなたの10種類の罪がなくなるから」と言いました。

ギリシュは「私の罪の数は10では収まらない」と言いましたが、シュリ・ラーマクリシュナに強く勧められたので、厭々沐浴に出かけました。

沐浴の結果ギリシュは心身共にとても軽くなりました。

**＊パスチャターパ**(Paschattapa)

　パスチャは「後になって」の意味であり、パスチャターパは後悔という意味になります。

過ちを後悔するのは当然ですが、罪を取り除くという方法としてここで取り上げているパスチャターパのより深い意味は、**悔い改めて二度と罪を犯さないと誓う**ことです。

罪(パーパ)を犯しては懺悔(ニヴェーダナ)をし、また罪を犯しては懺悔をする、というように何度もパーパとニヴェーダナを繰り返しているようではいけません。

毎週のように頻繁に告解室に入り、神父の前で懺悔しているようでは困ります。

皆さんは笑っていますが自己を浄化するのは簡単ではありません。